

他者の態度についての信念の更新

— 他者の態度情報を呈示することの効果 —

○平川真^{1,2}・小杉考司³

(¹広島大学大学院教育学研究科,²広島大学情報科学部,³専修大学人間科学部)

個人と社会を結ぶ循環過程が含まれる現象やモデルとしては、例えば、多元的無知 (Katz & Allport, 1931) や沈黙の螺旋 (Noelle-Neumann, 1993) がある。これらは、他者の行動を参照し、自分の行動を決定する行為者を考え、ある個人の行動が他の行為者の行動決定に影響する過程を想定し、個人と社会の循環過程を考えている。

本研究では、この過程における他者の選好や評価予測の更新に焦点をあてて検討を行う。具体的には、他者の態度情報についての情報を呈示することによって、「どのような態度を他者が一般的にもっているかについての信念」や「どのような人を他者が一般的に肯定的に評価するかについての信念」が更新されるのかを検討する。

方法

実験計画 多数派意見の内容を操作し、1 要因 2 水準 (賛成多数条件 vs 反対多数条件) の参加者間計画で実験を行った。

分析対象者 不適切回答者 40 名を除外し、142 名 (男性 61 名, 女性 81 名; 年齢範囲 18 歳—23 歳) を分析対象者とした。

手続き 話題を格差是正政策への賛否とした。調査は以下の 3 つのフェーズからなる。ここで態度とは参加者の態度を意味し、信念とは他者の態度についての信念を意味する。

1) 事前態度・信念の測定 格差是正政策への賛成意見を述べる者と反対意見を述べる者を呈示し、事前態度として「自分はどちらの意見に賛成か」を「賛成派・反対派・どちらともいえない」の 3 値で評定させた。事前信念として「他の人は、どちらの意見に賛成すると思うか」と質問し「賛成派・反対派・どちらともいえない」の予想割合を評定させた。また、他者が賛成派と反対派へどのような印象を持つかの予測について、それぞれの意見表明者に対して、「感じの良い—悪い」「親しみやすい—にくい」を 6 段階で評定させた。

2) 他者の態度の呈示 昨年度に同じ講義で同じ調査を行ったと偽教示をし、事前態度の結果を呈示した。「多数派:少数派:どちらでもない」について、70%:20%:10%の比率で回答結果を呈示した。

3) 事後態度・信念の測定 再度、事前態度・信念の測定と同じ項目を使い、他者の態度を呈示した後の態度と信念を測定した。

結果と考察

他者への態度情報を呈示することによって、他者の態度についての信念が更新されるかを検討した。事後の信念 (post) は、呈示された情報 (data) と事前の信念 (pre) を重みづけて構成されたと考え、式 (1) で表現した。ここで、 w は呈示された情報を利用する程度を意味する。これを変形して、個人の w を式 (2) で算出した。

$$post = w \times data + (1 - w) \times pre \quad (1)$$

$$w = \frac{post - pre}{data - pre} \quad (2)$$

算出した w のヒストグラムを Figure 1 に示す。条件によって分布の形が異なっているものの、アンケート調査の結果という現実世界で入手可能な情報としては確度の高い情報を呈示されても、その情報を完全に利用する (すなわち $w = 1$) 参加者は 22%程度 (142 名中 31 名; 賛成多数条件 22 名, 反対多数条件 9 名) であった。

さらに、 w と他者が賛成派と反対派に対してどのような評価をするかの予測の変化量との関連を検討した結果、反対多数条件においては、 w が高い人ほど、他者は格差是正政策へ賛成する人にも否定的な評価を与える、また、反対する人に肯定的な評価を与えるという予測を強めることが示され、他者の態度情報が他者からの評価予測にも影響することが示された。今後は個人差 w を規定する変数について検討する必要があるだろう。

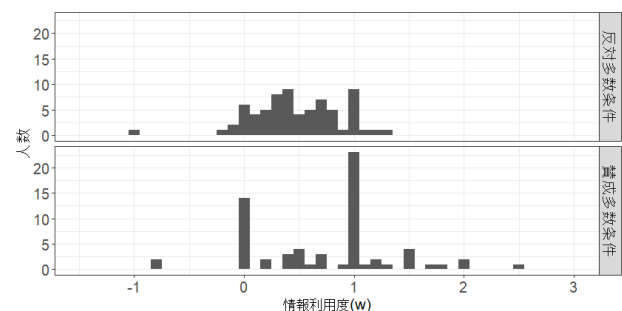


Figure 1. 情報の利用度 (w) のヒストグラム